

——夜だ。

男はふと思い出した。そう、辺りは闇に包まれている。

憂鬱な色調に染まった風景が何か異質なものに変容していく。単に色が変わったただけの変化ではない。それは風景が変わっているわけではなく、あるいは自分自身が変容しているからそう感じるのかもしれない。

男は歩むのをやめなかった。

——日が暮れる、日が暮れる、日が暮れる……

男は、呪文のように同じ言葉をつぶやいているのに気付かなかった。自らの口から出た言葉は耳に届かず、ただ減衰していくに任された。

浸されたような闇が広がっていた。

だんだんと木々のざわめきが大きくなっていくようでもある。木々の囁きは近づいては遠ざかり、遠ざかっては近づく。波濤にも似たその音は、漠とした寂寥に満ちていた。

——俺は……誰だ……

聞いているものも無いのにぼつりと男はつぶやいた。それもまた、無意識に男の口から零れ出たものに過ぎなかった。

木々の葉の擦れあう音以外は、砂利を踏む音しか聞こえない。……男は歩き続けた。

しばらくすると、男は急に何かに呼ばれたように砂利道を外れ、林の中へと入っていった。草むらをかき分け、まるで、何かに追い立てられるかのように——しかし速度は非常にゆっくりと——進んでいった。

——俺は……オレハ……オレ……ハ……

言葉はもはや単なる音でしかない。男はその場にひざまずいた。

急に男は手で地面を掘りだした。手で土をかき分け、掘る。やがて爪は剥がれ、指先の傷が裂ける。しかし男は掘るのをやめない。

永遠、あるいはそれ以上の時間が過ぎたのかもしれない。男は、かなり深くまで掘り上げた。すると、男は、何か白い物——を掘りだした。それは骨であった。

男はそれを長い間見ている。思い出しているようでもあった。あるいはそれから何かを

読み取っているのかもしれない。骨がそのまま墓碑銘でもあるかのように。

ふいに、男は何かに気づいた。

——そうだ、俺は……

頭に殴られたような衝撃が走った。——衝撃だけで、痛みは無い。痛みを自覚する前に意識を失った。そのまま体は生命活動を止め、冷たくなっていった。——死。男はここで殺されたのであった。

男はそのまま土をかけられた。自分の掘った穴に埋められたのだ。自分の死を自覚しないまま——

辺りはまだ暗闇に包まれている。まだ夜の明ける気配は無い。

いや、そもそもそれは夜でさええない。ただ意識の中にぼっかりとあいた奈落なのだ。死を自覚しない限り、この闇は明けることがない。そう、永遠に。

土の中から抜け出た男は、朦朧と立ち上がった。

男は、ゆつくりと歩き出す。まるでこぼれ落ちた記憶を拾うように。

この情景を何度繰り返したろうか。しかし男は自分が死んだことに気付かない。明けることの無い夜。

男はいつ気付くのだろうか。自分が死んでいることに。だが、自らの墓碑銘を読み終えるその日まではこの暗青色の夜が明けることは無いのだろう。

男は歩き始めた。

——夜だ。

男はふと思い出した。そう、辺りは闇に包まれている。

〈了〉